

学校設置協議会ニュースぱらす

H31.2.6 第3号

今回は「得た知識・技能を活用する力」の育て方——「主体的・対話的で深い学び」についてお伝えしました。第3号では、今回の学習指導要領改訂で変化するその他特徴的な点についてお伝えします。



なぜ今「資質・能力」？大学入試改革との関係は？

学習指導要領改訂のポイント③

「生きる力」と「B問題」一段階的に変化してきた学力観

知識が多いだけでは、幸せな人生を送れるとは限らない。知識を自在に使いこなして、問題解決に生かす力が重要である——こういった議論は以前から重ねられてきました。1996年度改訂のキーワード「生きる力」は、そのような「資質・能力」の育成を視野に入れた言葉です。

また、2007年から小学校6年生・中学校3年生を対象に実施されている全国学力・学習状況調査では、「主に知識」を問う「A問題」のほか、「主に活用」を問う「B問題」が出題されています。知識を活用して考えさせる授業の取り組みも、2007年頃から徐々に進んでいます。そして明年2019年からは「知識」と「活用」が一体となった形で出題されるようになります。

新指導要領では、小学校・中学校とも各教科などで指導する目標を（1）知識・技能（2）思考力・判断力・表現力等（3）学びに向かう力・人間性等の「資質・能力の三つの柱」に整理し、育成する方向性を明確にしています。「主体的・対話的で深い学び」は、そのための手法です。

そうした新学習指導要領の趣旨を踏まえた指導の改善・充実に今から乗り出すため、知識と活用を一体的に問う形で調査を行うことにしたのです。



また、今回の改訂で、特にクローズアップされているのは、大学入試改革（高大接続改革）と連動している点です。

小中高教育の「出口」を変える

ここでちょっと歴史を振り返ってみますと、日本に最初の「学校」が生まれたのは明治5年でした。この頃は日本に限らず、多くの国々で工業生産中心の国づくりが進んでいました。工業社会では、共通の知識を数多く身につけ、与えられた役割を正確にこなす人材が求められ、学校も長らくそのような力を養成してきたという面がありました。教えられたことに疑問を感じたり、もっと良いやり方がないかと工夫したりすることは、かえって「非効率的」だったのです。大学入試や高校入試も、「教えられた正解を教えられた通り答えられるか」を試すテストが主流でした。

しかし、世界は工業生産中心の社会から、情報やアイデア、イノベーション（技術革新）が大きな意味をもつ知識基盤社会へと急速に変わりつつあります。しかし、小・中・高等学校教育の出口ともいえる大学入試が変わらなければ、従来型の受験勉強もなくなりません。

今回の入試改革は、もちろん教育の論理が主導するものですが、同時に「イノベーションを生み出せる人材を養成しなければ、日本は生き残れない」という産業・経済界の強い要請が背景にあることも事実です。

「大学入試」から「高大接続」へ

大学入試問題は、知識の活用を問う方向に、すでに変わってきています。また、たった一度のテストで生徒をふるいにかけるのではなく、生徒一人ひとりが学んできたことを時間をかけて精査し、「生徒が学びたいこと」と「大学が育てたい人材」をマッチングさせる* A O入試が、私立大学はもとより、近年は国公立大学でも広く行われるようになってきました。A O入試では、書類選考や面接に手間はかかるのですが、不本意入学がないため、A O入試で入ってきた生徒たちは学ぶ姿勢が明確で意欲が高いといえるでしょう。

*A O入試…大学の入学管理局 (admissions office) による選考基準に基づいて、学力試験を課さず、高等学校における成績や小論文、面接などで人物を評価し、入学の可否を判断する選抜制度。



学校設置協議会ニュースぱらす

H31.2.6 第4号

前回までで、小学校・中学校・大学入試と学習指導要領改訂によって、
変化する内容についてお伝えしてきました。いよいよラストとなる第4号
では、高校の変化についてお伝えします。



高校入試も変わるの？

学習指導要領改訂のポイント④

ますます求められる「思考力・判断力・表現力」

新学習指導要領の全面実施は、小学校は2020年度、中学校は2021年度、
高等学校は？という2022年度となります。具体的にいうと、今の小学校6
年生が高校生になるのが2022年度です。2022年度以降、高校では科目再編
により、選択科目に「古典探究」「世界史探究」「理数探究」など、「探究」
のつく科目が多く導入されます。これに先立ち、「探究」系の学習をカリキュ
ラムに入れ込む高校も増えています。

その背景として、大学入試改革があります。今後は、国立大学でもAO入試
や推薦入試の比重をさらに増やし、高校時代に取り組んだ課題研究や課外活動
の内容も積極的に評価していく方針が明らかになっています。大学志願者が、
課題研究等の活動内容を自分で書き込む*eポートフォリオの研究も進んでい
ます。*eポートフォリオ…部活や学校外の活動成果など、高校生活のさまざま
な活動の記録をデジタル化して残すことができるシステムのこと

つまり、自分なりの問題意識をもって思考力・判断力・表現力を深めていく
ことが求められており、そのことが希望の大学進学にもつながるわけです。こ
の流れを受けて、高校入試も変わってきています。公立高校の国語や英語の入
試でも、文章を読ませ、それをふまえて自分の考えを書かせるといった記述問
題を出題するところが増えてきました。

「読む」「考える」「書く」ことに慣れる

このような問題は、機械的な暗記やテクニックでは歯が立ちません。また、「自分の考えを書く」ためには、まず出題されている文章の趣旨を読み取り、それをふまえて考える必要があります。考えたことを人に伝わるように書くには慣れが必要ですし、英語の場合さらに英作文の訓練が必要となってきます。

つまり、今後は「読む」「考える」「書く」作業に慣れることが、ますます大切になってくるのです。

高校入試にも、英語の外部検定導入が進む方向へ

英語の4技能（「聞く（listening）」「読む（reading）」「話す（speaking）」「書く（writing）」）重視が、高校入試でも進んでいます。たとえば大阪府（大阪市・堺市含む）では、2017年度から、TOEFL iBT（トーフル アイビーティー）、IELTS（アイエルツ）、英検の成



績を教育委員会が定めた換算表に基づいて得点化し、英語の学力試験と比較して点数の高い方を採用することとなりました。その他、東京都や福井県でも外部検定導入の検討が行われています。

「自分で決める」経験が思考力・判断力・表現力を磨く

思考力・判断力・表現力を養うために、まず必要なのは「自分で決める」こと。それには日常生活の中で「こうしたい」「自分はこう考えた」といった意見が、お子さまから出てくるまで待つことが、いちばん重要かもしれません。
ご自身の中に「こうすればいいのに」という考えがあっても、それを言わずに待つ。とにかく先回りして答えを出さないことが大切です。

また、思考力・判断力・表現力は、教科の勉強以外のシーン、部活や学校行事の中でも育まれていきます。好きなことに打ち込む時間を大切にし、思い切り楽しんだり悩んだりすることが、そのまま考え、判断し、表現する力につながるんですね。学校生活が幅広く様々なことにチャレンジする場となるよう、応援してあげていただければと思います。

